

日本銀行福島支店旧店舗

中村茂樹 日本銀行文書局技師

明治三十二年（一八九九）、日本銀行は、東北地方初の拠点として福島市に出張所を設置しました。その後、福島出張所は支店に昇格します。福島支店開業時の店舗は、七〇年間にわたり地元から親しまれたベージュ色の明治洋風建築でした。第八回は、そんな福島支店の旧店舗を紹介します。

福島出張所の開設

江戸期より全国有数の生糸産地として栄えた福島は、明治期には、生糸の輸出がさかんとなったことに伴い、生糸の集散地、東北部の金融の中心地として更に発展します。

また、明治二十年（一八八七）十二



写真1 初代福島出張所



写真2 同口ビル風景

月に日本鉄道（現東北本線・上野〜仙台）の開通により福島駅が開業し、明治三十二年（一八九九）五月には奥羽本線（福島〜米沢）が開通しました。これにより、東北・奥羽二大路線の分岐点となる福島は、東京と東北地方を結ぶ重要な拠点となり、商取引がますます活発に行われるようになります。その中で、生糸業者を中心とする地元からの強い要望を背景に、明治三十二年（一八九九）七月に、福島出張所を開設することになります。全国で七番目、東北地方では最初の拠点開設です。

出張所開設当日は、「一〇五万円の現金が運ばれてくる」ということで、駅前通りは時ならぬ緊張感がみなぎ

り、興奮した人垣の中を、赤い旗を立てた十数台の馬車に積まれた現金箱が、物々しい警戒のうちに出張所に運び込まれたといえます。当時、米一升が一二銭でした。

また、地元有力者は「これで福島は名実ともに全国七位の経済力になった」と喜び、誘致祝いとして市内に芸者連による花魁道中（注1）まで繰り出したといわれます。

福島出張所は、現在も同じ場所に支店を構える福島市本町の七七〇坪（約二、五五〇㎡）の土地とそこに建つ二三棟の建物を購入してスタートしました。（図1）このうち出張所の営業所として、福島有数の生糸問屋「万国屋」が所有していた土蔵造りの二階建て



写真上 旧店舗の外観
写真下 旧店舗の営業場

（注1）花魁道中
江戸時代、位の高い吉原遊郭の遊女が馴染み客を迎えるため、美しく着飾って遊郭の中を練り歩いたこと。今日でも各地の催し物として再現されている。

（注2）奥村精一郎
明治四十二年（一九〇九）東京帝国大学工科大学（現在の東京大学工学部）造家（建築）学科を卒業。日本銀行技師。日本銀行旧函館支店、日本銀行旧福島支店の設計に携わる。

（注3）葛西萬司
明治二十三年（一八九〇）帝国大学工科大学（現在の東京大学工学部）造家（建築）学科を卒業。日本銀行技師として本店本館、西部支店に携わった後、辰野金吾と辰野葛西建築事務所を共同経営。旧盛岡銀行本店本館、東京駅等を設計。

図1 福島支店の所在地



(注) 昭和2年に建築された木造平屋建ての純和風建築で、阿武隈川を借景とした日本庭園と共に市民の憩いの場として親しまれている。(平成12年に福島市に売却)

そして明治四十二年(一九〇九)十月、福島出張所の新築計画が決定します。 福島出張所(支店)の建築

福島出張所の新築計画が進められるなか、明治四十四年(一九一〇)六月に出張所は支店に昇格します。

福島支店の設計は、辰野金吾(写真3)と長野宇平治(写真4)に委ねられ、さらに函館支店の設計に引き続き奥村精一郎(注2)が再び加わりました。

で、二階には八〇畳敷きという福島一と言われた大広間をもつ建物を使用しました。(写真1。)

開設当初の建物はいずれも敷地内の既存土蔵等を改造したものでした。老朽化が進み、さらに事務量の増加による狭隘化^{せうがい化}が著しくなったため、明治四十年(一九〇七)十二月には、平屋建てのレンガ造りの金庫を新築し、更に将来的な建て替えに先行して、敷地内の既存行舎を仮営業所として増改築することになります。



写真3 辰野金吾
明治12年(1879)工部大学校(現在の東京大学工学部)造家(建築)学科を第1回生として卒業。近代日本建築界の先覚者。日本銀行建築顧問。日本銀行本店本館のほか、東京駅など明治大正期の日本を代表する建築物を数多く手掛けた。(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



写真4 長野宇平治
明治26年(1893)帝国大学工科大学(現在の東京大学工学部)造家(建築)学科を卒業。わが国屈指の古典主義建築家として知られ、日本銀行本支店を始めとする数多くの銀行建築を手掛けた。(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

所を設立し、東京駅舎(注4)を始めとする数多くの建物を設計する中で、東北地方でも福島支店に前後して盛岡銀行(注5)や福島県農工銀行(注6)などを設計することになります。

一方、長野は明治四十二年(一九〇九)七月に着工した小樽と翌明治四十三年(一九一〇)春の着工を予定している函館の設計中に福島支店の設計が始まることとなり、二週間近い行程で東北・北海道の三つの建設地を精力的に確認してまわることとなります。

また、長野は台湾総督府(注7)の設計コンペで優勝するなど建築家としての名声を上げ、後に自らの建築事務所を設立する転機となる時期でもありました。

明治期に開設した本支店の建築は、本店本館から始まり福島支店を最後に一段落することとなり、昭和元年(一九一六)に日本銀行の建築組織は解散します。福島支店は辰野と長野が共同で設計する最後の建物となりました。

新築工事は、先行して建築した仮営業所を使用しながら先ず旧本館を撤去し、その跡に新築する新本館に業務を移した後、仮営業所と残存付属家を撤去し、さらに金庫の増築と新付属家等

(注4) 東京駅舎
辰野葛西建築事務所設計により明治四十一年(一九〇八)に着工し、大正三年(一九一四)に開業した東京の中央停車場。東京大空襲により焼失したドーム屋根等は平成二十四年(二〇一三)に復原された。国の重要文化財に指定。

(注5) 盛岡銀行
明治二十九年(一九〇六)に岩手県盛岡に設立された商業銀行で現在の岩手銀行につながる。明治四十四年(一九一〇)に建築された本店は辰野葛西建築事務所設計による辰野式赤レンガ建物で、若手銀行中橋支店として現存し、国の重要文化財に指定されている。

(注6) 福島県農工銀行
農工業の改良のための長期融資を目的に、明治三十一年(一九〇八)に設立し、昭和十九年(一九四四)に日本勧業銀行(現みずほ銀行)と合併(勧業銀行福島支店)。日本銀行福島支店と同時に建築された本店は辰野葛西建築事務所設計による辰野式赤レンガ建物で昭和中期に解体された。

(注7) 台湾総督府
明治三十八年(一九〇五)に設立された台湾を統治するために設立された日本の出先機関(昭和二十年(一九四五)解体)新庁舎建設にあたり、明治四十年(一九〇七)に日本初の正式な建築コンペが行われ、長野宇平治のデザイン案が採用された。同庁舎建物は現在でも台湾の総統府として使用されている。



写真7 旧店舗の外壁装飾

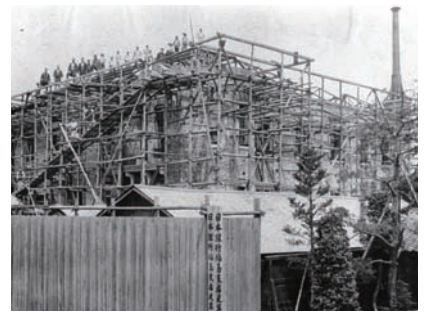


写真5 旧店舗の工事風景



写真6 旧店舗の屋根

を建築することになります。

工事は部分請負で施工されることとなり、レンガ積み等の主要工事は小樽支店建物（明治四十五年（一九二〇七月完成）を一括請負で施工した富樫文治（注8）が日本銀行からの強い信頼を得て、引き続き請け負いました。（写真5）

明治四十四年（一九一九）八月に着工した工事は、大正元年（一九一〇）十一月に本館が完成し、大正二年（一九一三）六月に全ての工事が完成しました。

福島市を代表する 明治洋風建築

新築時の福島支店はレンガ造り二階建ての本館、平屋建ての金庫および食堂・宿直室等の配置された木造平屋建ての付属家のほか、レンガ造り二階建ての倉庫等で構成され、本館、金庫お

よび付属家は渡り廊下で接続されています。（図2）

本館の大屋根は、先に完成した小樽支店と同様に鉄骨トラス構造の小屋根組みで支えられ、同小屋組みの上に防火用のコンクリートを打ち、その上にスレートを葺いています。また、東南角のドーム屋根と、正面両側にペディメント（注9）を簡素化した切妻屋根を設け、正面の二カ所と背面の一カ所にドーマ窓（注10）を設置しています。（写真6）

外壁はレンガ積みの上に赤砂を練り合わせたモルタルを塗り、腰部の仕上げに稲田産花崗岩とレンガ積みを施しています。（写真7）外壁の装飾として一階に四列、二階最上部に一列の化粧レンガの帯を廻らし、各窓上部にも化粧レンガを貼付しています。

更に、正面外壁の一、二階窓間（四カ所）と切妻屋根（二カ所）の下に施した砂岩製レリーフも特徴のひとつです。

ベージュ色の外壁に簡素化された様式装飾が施された外観には、本店本館から始まる明治期の日本銀行建物に共通する古典主義様式の重厚さから解放されたある種の軽快さが表現されています。

辰野と長野の最後の共作は、長野の

デザインがいままで以上に強く表現されているともいえます。

福島に生まれた軽快な明治洋風建築に市民は目を見張りました。

付属家の改築

その後、木造平屋建ての付属家は新築から二〇年近く経過し老朽化が顕著となり、また職員数の急増によりはなはだしく狭くなったため改築されることとなります。木造付属家は隣接する金庫と本館の防火上からも問題があるため、鉄筋コンクリート造二階建てとして、昭和七年（一九三二）十二月に完成しました。（写真8）

更に、昭和二十四年末には職員数が大幅に増加し、付属家が再び狭くなったことから、昭和二十五年（一九五〇）十月に既存の二階建て付属家の上に鉄骨造の三階を増築（写真9）したほか、翌二十六年（一九五二）八月に自動車庫を新築し、更に二十七年（一九五二）に荷捌所を新築することに対応しました。（図3）

また、昭和四十年代に入り、金庫の保管量増加に伴う将来的な金庫増設に対応する余地を確保するため、昭和四十三年（一九六八）十一月に東側に隣接する二四〇坪（約八〇〇㎡）の土



写真9 昭和25年増築の付属家（右側）



写真8 昭和7年改築の付属家

（注8）富樫文治

明治期の東京神田の棟梁。日本銀行本店本館の施工に関わったほか、小樽支店と福島支店の新築工事を請け負った。大正六年（一九一七）の新聞死亡記事（享年六四歳）で「建築請負業界の偉人」と紹介されている。

（注9）ペディメント

西洋建築の切り妻屋根における妻側屋根下部と水平材に囲まれた三角形の部分。

（注10）ドーマ窓

西洋建築における屋根裏や吹き抜けへの明かり採りや外気導入を目的とした窓。



写真10 現在の福島支店

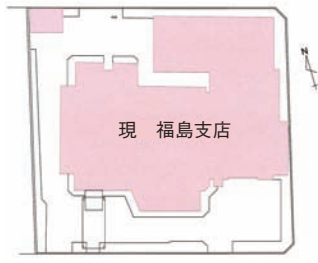


図4 現在の福島支店の配置図

その後の更なる業務拡大により、昭和四十年代末には既存金庫の収容力は飽和状態となり、本館建物も狭隘化と老朽化が著しくなり業務に支障が出てきたため、新店舗の建築が計画されることとなります。

文化財や町並み保存の必要性が強く求められ始めた時代を反映し、日本銀行では福島最後の明治洋風建築となっていた二代目店舗の保存および代替地への移転新築を検討したものの、取引先の利便性と老朽化対応も考慮すると難しく、現地建て替えしか選択肢はありませんでした。

福島の記憶に残る旧店舗

地を購入します。

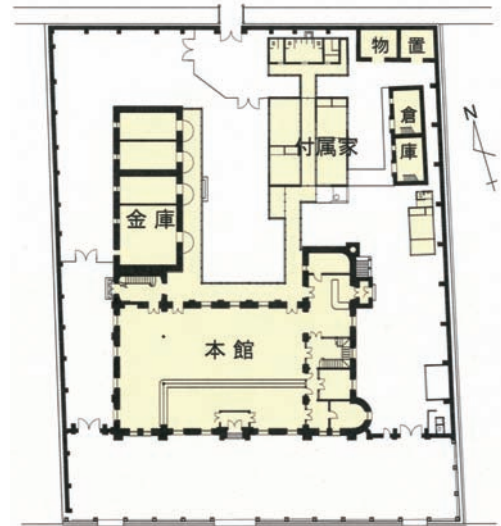


図2 旧店舗の配置図（新築時）

市民に惜しまれながらも、昭和五十三年（一九七八）十二月に旧店舗は解体されました。その跡地に新店舗の建設が開始され、昭和五十五年（一九八〇）に完成しました。写真10、図4完成した新店舗は、旧店舗に比べ延床面積を二倍、金庫収容能力を六倍に増大したものでした。

旧店舗の解体に先立って、市民への一般見学が行われ、また旧店舗の内装材の一部を取り外し福島市に寄贈しました。

現在も、福島支店の面する表通り（レング通り）は金融機関、証券会社、生命保険会社などが立ち並び、「福島のウォール街」と呼ばれています。（写真11）かつて路面電車が走っていた通り



図3 旧店舗の配置図（昭和27年荷捌所増築時）

大震災を乗り越えた福島支店が、いつまでも変わらず市民に親しまれていくことを願っています。

は、レンガを敷き詰め、ベンチやブロンズ像が配置されたコミュニティ道路に整備され、レンガ通りと呼ばれています。その歩道には路面電車（注1）や春の風物詩「吾妻の雪うさぎ」（注2）と共に、福島支店の旧店舗をあしらったタイルもはめ込まれ、福島の懐かしい記憶を残しています。（写真12、13）

平成二十三年（二〇二一）三月、東日本大震災が発生し、福島県は甚大な被害を受けました。幸い地震による福島支店の被害はほとんどなく、当地が原発事故による風評被害や相次ぐ余震に見舞われる中、他店からの応援も仰ぎながら地域経済の復旧・復興に力を尽くしました。



写真11 旧店舗時代の「福島のウォール街」風景



上/写真12 現在のレンガ通り風景

左/写真13 レンガ通りを走る路面電車

旧店舗をあしらったタイル



（注1）路面電車
福島市内と伊達市の主要地を結ぶ路面電車。明治四十一年（一九〇八）に信達軌道として開業した後、飯坂東線、福島交通と改称し、昭和四十六年（一九七二）に廃止されるまで、市民の足として親しまれた。

（注2）吾妻の雪うさぎ
早春の吾妻小富士（摺鉢山）の山肌に残る雪がうさぎのような形に見えることから「雪うさぎ」と呼ばれる。福島市民に春の訪れを知らせる風物詩となっている。